
私は恨む、貴方の全てを

Kei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は恨む、貴方の全てを

【NZコード】

N8135N

【作者名】

Kei

【あらすじ】

未来の人造人間達と、その人造人間達に両親を殺された少女の物語。親から愛情をもらえたかった少女・リリイは人造人間達と共に暮らしていくうちに、家族がなんのかを学んだ。だが……残酷な運命が、一刻と迫っていた。…………お友達への贈り物に書いた小説です^_^ 未来の人造人間達とヒロインである少女・リリイのお話です！！ 終盤辺りでトランクスもガツツリ登場します！！（笑）

4部構成になつております！！

出会い（前書き）

第一部は、人造人間と少女の出会いです！！

出会い

無くしていた感情を、貴方達が私に『与えてくれた。

貴方達に拾われてから…貴方達は私のすべてとなつた。

【私は恨む、貴方の全てを・出会い】

今日も私はお留守番。今、この星の破壊を楽しんでいる人造人間17号と18号は…たぶん、また沢山の人間達を殺しに行つたんだ。

私の両親も、人造人間の2人に殺された。

その時の私はまだ5歳で、目の前で起きたことが何なのか…全く理解が出来なかつた。ただ、分かつたことは…もう一度と両親の目が覚めることはないということだけ。

けれど悲觀はしなかつた。幼い私は…両親の死体を、ただじつと見つめているだけだつた。

涙も出なかつた。

だつて……

私はこの2人から、溢れるほど愛を注いでもらった記憶が全く無かったから。

いつも仕事で家に居なくて、『ご飯は近くのモールで買つてきた惣菜ばかり。

母の手料理など食べたことは無かつたし、優しく笑いかけてもらつた記憶も無かつた。父と共にかけたことなど無く、肩車をしてもらつた記憶も無かつた。

私は何の為に生まれてきたのだろうか？

幼いながらにそんなことを何度も思つた。

そんな時……人造人間の2人がこの地球を破壊し始めたんだ。

時期に私達の住むところにも奴らがやってくるからと、両親は荷物をまとめて私の手を引き街を出ようとした…まさにその時。私の住んでいた街は2人の人造人間によつて破壊された。

父も母も私の目の前で動かなくなつた。

ただ、ボーッとその光景を見ていたとき…

『おやおや、パパとママが殺されて悲しいのかい？』

『 しょうがなさい、逃げようとしたお前の親が悪いんだ』

金髪のきれいな女性と、黒髪のかつこいい男性が目の前に降り立つ。2人の姿をただジッと見つめる。その瞳は冷たくて、けれどどこか楽しそうに私を見つめて笑っていた。

『 …貴方達がこの2人をこんな風にしたの?』

『 そうさ、馬鹿な人間どもをこの世界から刈り取る為にな』

『 本当は孫悟空ってやつを殺せばそれでよかつたんだけどね。ゲームだよ、ゲーム!!』

この人たちにとって、人間を殺すことも街を破壊することもただのゲーム。そう言って楽しそうに笑っていた。

『 さあ、あんたも2人の元に逝くんだよ!!』

ぼうっと明るい光が、女人の手に集まつた。それが何なのかは分からなかつたけれど…それがこの街を破壊したのだと…すぐに分かつた。

『 へえ、怖くないのか?今から死ぬんだぞ?』

男の人が私に聞いた。

『 怖くないよ。だつて…』

私は2人を見つめて…

『 私、この世界にいても…しあわせじゃないから…』

そう、言った。

幸せだと思ったことなど一度も無い。ただ私は生きているだけで、何も感じたことなど無かつた。人造人間が街を破壊していると聞いても、そつなのかと思うだけで…怖いと感じたことは全く無かつた。

私の感情は…全て欠落していたんだ。

『面白いガキだ』

男の人がニヤリと笑つた。女人も興味深げに私を見ていた。

『18号、このガキをアジトに連れて帰る?』

『はあ?何を考えてるんだい、17号?』

『いや?ただ…』

私を見下ろしていた17号と呼ばれた男の人は…

『暇つぶしになると思つてや』

冷酷な笑みとは違つ、笑みを私に向けた。そんな17号を見て、溜息を吐く18号と呼ばれた女性だつたけど…

『仕方ないねえ、あんた一度言い出したら聞かないから…』

呆れていたけれど、同じように私を見てどこか楽しそうに笑つていた。

それが…世界を恐怖に陥れている人造人間たちとの出会いだった。

あれから3年の年月が流れた。私は今…人造人間たちのアジトにいる。最初は“いつか殺されるかもしれない”という思いを抱いていたが、今ではもうそんなことを感じることも無くなつた。だつて…

「ふう、疲れた…」

「あ、おかえりーー！」

「ただいま、リリイ」

出迎えれば、17号は嬉しそうに笑つてくれる。

「私はあんたに振り回されて疲れたよ、17号ーーー！」

「ふふっ、おかえりなさいーーー！」

「ああ、ただいま」

18号も…街に出でているときは違う優しい笑みを私に向ってくれる。

両親が私に向けてくれなかつたその笑顔を、2人は私にだけ向けてくれる。最初は2人から何度も「いつでも殺すことはできるんだ」と脅させていたけれど…一緒に時を過ごすうちに、2人がそう言うことが無くなつた。それどころか、冷たい視線ではなく、優しい眼差しを私に向けてくれるようになつた。

私しか知らない、17号と18号の姿。

2人と一緒に過ごすうちに、私も自然と感情を取り戻していった。

残していたおやつを17号に取られたことが許せなくて、泣きながら怒った。このとき私は、泣き方と怒り方、そして悔しいという感情を覚えた。

2人が街に出たとき、18号が私にと洋服を持って帰つて来てくれたことが嬉しくて、笑いながらありがとうを何度も言つた。感謝の気持ちと笑い方、そして嬉しいという感情を覚えた。

「それにしてもしつこいなあ、トランクス…そして孫悟飯…。あいつらの相手もそろそろ飽きてきたぞ」

「いいじゃないか、いい暇つぶしになつて。まあ、その度に服をこんなボロボロにされちゃたまつたもんじやないけどね」

そして…街から帰つてくる2人の姿を見て…

「17号、18号…」

ボロボロになつたその姿を見て。

「リリイ、なんて顔してるんだい？私たちは大丈夫だよ。いつも言つてるだろ？」

悲しいという感情を覚えた。自分がそういう風になつているわけじゃないのに…心が凄く苦しくて、痛くて。

「だつて…17号も18号も…ボロボロだよ？私…2人にはいつも沢山お世話になつてるので、私は2人のために…何も出来ない…」

非力な自分に悔しささえ覚えた。けれど、そんな私を見て…17号

と18号はそつと私の頭を撫でてくれる。

「バカだねえ、そんなことを考えていたの？あんたがそんな顔する必要は無いんだよ。リリイが笑つて出迎えてくれれば、私はそれで十分さ」

「お前の笑顔はこの下らない世界の中では唯一の癒しだからな。だからリリイ…」

そして2人は私の視線にあわせるようにかがんで…

「さあ、私達のために…」

「笑つてくれ」

ふわりと微笑んでくれる。

私が笑うことで、この2人が喜んでくれるなら…

「うん…ーー」

私はいくらでも笑つていられる。

この2人がしている行為は、本当は凄く悪いことだというのは分かっている。けれど…私は世界なんかよりも、17号と18号のほうが大事。

だから…

「敵…早くやつつけられるといいね！！」

「何言つてゐるんだ！！あんなやつらすぐにでも殺せる。ただ遊び相手が居なくなつたらつまらないだろ？だから生かしてやつてるのさ」「リリイ、心配はいらないよ。あいつらより私達の方がずっと強いんだからね」

早く2人の障害になる人間がいなくなればいいと…そう思った。

もしかしたら私はどこかで人間を恨んでいるのかもしない。両親が私に何も与えてくれなかつたことで…私は知らない間に人間そのものを恨んでいたんだ。私も…人間なのに。

けれど、何も与えてくれなかつた両親よりも…

「そんなことより、今度リリイも一緒に外に出ない？あんたの好きな服が選べるよ…！」

「本当？行く！！行きたい！！ねえ、17号いいでしょ？」

「つたく…しきうがないなあ。ま、気分転換に今度3人で出掛けるか」

人類の敵であるこの2人の方が私は好きなのだと思った。

「ふふつ、何か…17号と18号つて私のお兄ちゃんとお姉ちゃんみたい…」

この2人が本当の家族だったらどんなによかつただろう？

ふと漏らしたそんな私の言葉に、17号と18号は…

「何言つてゐるのさ？私たちは家族だろ？」

「血は繋がつてなくとも家族にはなれる。リリイは俺達のかわいい妹だ」

何を今更、といつた顔で笑つてくれた。

その時私は初めて知つた。

「うんっ……17号がお兄ちゃんで、18号がお姉ちゃん……」

これが“幸せ”なのだと…。

「17号みたいな兄貴だと、大人になつたときに苦労しそうだね…」

「18号、それはどういう意味だ？」

「言つたままの意味だよ」

「何だと…？」

18号の言葉にムキになつて怒る17号の姿がおかしくて…

「あはははっ……」

私は感情のまま…声に出して、そんな2人の様子を見て笑つていた。

たとえ世界の敵でも。

私にとってはかけがえのない家族。

血は繋がつていなくても。
私の兄姉。
きょうだい。

ずっと、ずっと…こんな日が續けばいいと… 2人の姿を見ながら、私はそう思った。

出会い（後書き）

お友達から頂いたリクは「未来の人造人間と少女の物語」というざつくりとした設定でした（笑）ただ一つだけ、重大な設定を頂いてるので…それがうまく生かせるか…ちょっと心配です^-^・今回は、人造人間達と少女・リリイメインです！！てか、暫くはこの3人がメインです！！（笑）

お出掛け（前書き）

第一部は人造人間達と一緒に出掛けのお話です！！！基本的にはほのぼのしてます^_^最後にちょこつとトランクスが…！（笑）

お出掛け

人々はみんな“化け物”と恐れるけれど……

私は2人が本当はとても優しいのだということを知っている。

【私は恨む、貴方の全てを…お出掛け】

いつものように街に出て行つた2人。帰ってきたときはいつもとは違つてボロボロになつてなくて。

「今日は敵…来なかつたの? 2人とも服がきれいなまま」

いつものようにただ、“ゲーム”を楽しんできただけなのかと思つたけれど…。

「いや、戦つたさ孫悟飯と。そして…仕留めた…」

17号は口角を吊り上げて冷たく笑つた。

「玩具が減つて退屈になるけどね。まあ、もう1匹残つているからそれでいいや」

18号も同じよつこ笑つてゐる。

「ふうん… そうなんだ！！おめでとうーー！」

2人が喜んでいることが私には分かつた。そして、素直に… 2人の敵が減つたことが嬉しかった。同じ人間の死よりも、人類の敵の勝利に…

「ふふっ、ありがとうリリイ」

「あとはトランクスだけだな」

私は喜んでいた。

それから暫く、敵が現れるることは無かつた。17号も18号もつまらないと言つていたけれど… 私はボロボロになつて帰つてくる2人を見ないで済むからその方がいいと思つた。

そして、以前の約束… 外へのお出掛けもよくするようになつた。最近は敵が襲つてこないからと、17号と18号は最近よく私を外へと連れ出してくれる。

最後に見たときには辛うじて残つっていた街並みも…

「わあ、木つ端微塵…！」これ、17号と18号がやつたの…？」

「ま、俺達とあいつらが戦うといつも激しくなるからな。俺達だけのせいじゃない」

「殆ど私たちがやつたも同然だけね。あ、そこの街がいいよー！… 降りようー！」

今じゃボロボロ… 見る影も無かつた。そこはちょうど、私の住んでいた街で、私の両親がこの2人に殺された場所。久々に訪れたそこに…

「…ホント、変わっちゃった」

懐かしさも、ましてや悲しみを感じじるのも無かつた。

「さて、俺は残ってる人間を探して殺そうかな…」

「私とリリイは服選びだ。17号、ほびほびにしてよ? 店まで壊されたらたまたもんじゃないからね!…」

「分かってるわ。ほら、リリイ…18号と好きな服を選んできな」

「うん!…18号、こっちにかわいいお店があるんだよ!…」

「そういうやあんた、ここのは出身だつたね…。じゃあ、今田のナビはリリイに任せよつかな?」

「うん!…」

ただ2人と一緒にいることが楽しい…それだけ。

「ほら、ここ!…」

「へえ、こんなところにこんないい店があつたなんて…さすがはリイ、私の妹だ!…見る目があるよ!…」

「ふふつ 早く行こう!…」

18号は服選びが上手だから、一緒に洋服が選ぶのが本当に楽しい。まあ…店に入ると決まって…

「邪魔だよ、死にな!…」

「ヒィイツ!…」

18号いわく、“片付け”から始まるんだけど。けどそれも私にとつては別に“どうでもいい”ことで…。18号に殺される直前に、店主は命からがら逃げ出した。その様子を、18号は面白そうに笑いな

がら指差している。

「見てみなよ、無様なものや……リリイとは大違いだね……」

同意を求められても……と困った顔を18号に向ければ、せつさの冷たい視線から優しい瞳に戻る。私の好きな18号。

「ふふひ、『』めんよ？あんな奴と比べられても分からな『』よね？さ、早く服を選ぼう！－好きだけ選んでいいからね」

「うん！－…じゃあ、私が18号の洋服選んであげる……」

「本当？…じゃあ私がリリイの服を選んであげるよ。とつておきのをね」

「やつたあ！－あ、折角だから17号の服も選んであげよ『』……いつも同じ服だし……」

「17号はあの服が気に入っているんだよ。だからいつも同じのを買つのか。それより…あいつはね……」

それから暫く、私たちは服選びを堪能した。約束通り互いで互いの服を選んで。これがいいとか、あれもいいとか…本当に楽しくて。そしたら…

「きやつ…？」

「つたぐ、17号の奴…」

大きな爆発音が響いてきた。18号が不機嫌そうに殴打ちする。この様子からして、この音の原因はびくやら17号。

「あれほど、『ほじほじ』って言つたのに……」

「けど欲しいもの、沢山選んだし17号へのお土産も決まつたし…そろそろ17号と合流しよう？…」

「そうだね、これ以上待たせると17号の奴ここまで破壊しかねないからね。さ、リリイ私に拘まりな。」

「うん！…」

18号に拘まつて音のした方に向かうと、そこには17号の姿。私に向けるとそれとは違つても冷たい笑みで、街のいたるところを破壊していた。

「17号！…ほどほどって言つたろ！？」

「まあいいだろ？その様子だと、18号もリリイも随分楽しんだみたいだしな」

17号が指差した先には、両手いっぱいに持つてている袋。もちろん中身は、2人で選んだ洋服。

「さて、帰るか」

スツと17号が私達のそばまで飛んでくる。さつきまで冷たく笑っていた17号はもういない。いつも私に向てくれる、優しい笑顔。私の大好きな17号の笑顔。

「久々にいいものが見つかったよ」

「どうやらそういうしな。リリイもいいもの見つけたか？」

「うん！…あ、そうだ…あのね！…」

私は自分が持つていた袋の中からあるものを取り出す。

あの時18号が教えてくれたから…。

「これ…スカーフ…？」

「そう……17号にお土産……洋服はいつも着てるのが好きだからスカーフの方が喜ぶよって18号が教えてくれたの……！」

「そつか……」

選んだスカーフはいつも17号がしているオレンジ色のそれとは違う赤いスカーフ。

「嫌……かな？」

ずっと前に17号に好きな色を聞いたときに赤が好きだと言っていた。人間の血の色……それが飛び散る瞬間が一番好きだと。その色が好きだと。だからと思って選んだ赤。暫く17号はじっと手渡したスカーフを見つめていた。

「やつぱり嫌？」

「ふふつ、なんだい17号……照れてるの？」

「ツ、18号……！」

「え？」

照れてるの？17号が？

「じゃ、じゃあ……氣に入ってくれたの？」

「さあ、どうだろうな？」

「もう、17号の意地悪ツ……！」

ハハツと17号は笑いながら、自分が付けていたスカーフを解くとそのまま宙へと投げ捨てた。そして、私が渡したスカーフを起用に首へと巻きつける。

「……似合つか？」

「うん！…凄く似合つ！…」

「さすが、リリイが見立てただけあるね。将来有望だわ」

17号は恥ずかしそうに、けれど嬉しそうに笑いながら私の頭を撫でてくれた。

こんな時間が…ずっと、ずっと…続くと…

私は勝手に、思い込んでいたんだ…。

* * * * *

俺がラジオの速報を聞いて駆けつけたときには…既に、人造人間は去った後だった。いたるところは破壊され、怪我に苦しむ人たちの姿がそこにはあった。悟飯さん生き後、俺はひたすら耐える生活をしていた。今の俺では…人造人間2人相手には勝てない…。けど希望はある。まだ…諦めるわけにはいかない。この世界の為にも、そして…唯一の家族である母さんの為にも。

「大丈夫ですか！？」

地上に降りて、救助隊と一緒に被害者の救出を手伝う。その時、一

人の男性が青い顔で俺に近づいてきた。

「に、兄ちゃん…あんた、あの化け物たちと戦つてる奴だよな…？」
「はい、そうですが…」

いろんな人から幾度と無く「やめておけ」と止められた。だが、ここでやめてしまったら…この地球に未来は無い。もう少し…もう少し我慢すれば、過去へ行ける。そうすればこの地球の未来が開けるかもしれない。

きっとこの人も俺のことを見止めるのだろうと思つた。だが…

「おっ…女の子が…！…女の子が奴らと一緒にいた…！」
「女の子…？まさか、新手の人造人間ですか…？」
「違う、ありやこの街に住んでた子だ…！…ずいぶん見ないから死んじまつたと思っていたが……まさか…？」
「奴らの人質に…？」
「そうとしか考えられねえ…！…頼む兄ちゃん…！…あの子を…リリイちゃんを助けてやつてくれ…！」

しつかりと握られたその手を握り返し、俺は誓つた。

「はい、必ず…！」

今はまだ無理でも、必ず奴らを倒す。

そして平穏な未来を取り戻す。

どうかその話まで… その女の子が無事であつまつあります。

お出掛け（後書き）

未来の人造人間は本当に非道な奴らというイメージが強いんですが…やっぱり何かきっかけがあつたら、過去の人造人間達みたいに人間と一緒に過ごすこともできたんじゃないのかな…？という妄想から生まれた産物です（笑）まあ、結局…リリイちゃんの前でしか、人間らしさは見せられないんですけどね＾＾；

ちなみに最後に登場したのは言つまでもなくトランクスです（笑）

永久の惜別、永久の恨み（前書き）

第三部です！！ついに運命の時が来てしまします！！今回はトランクスがガツツリ出でます！！ただ、原作・アニメをご覧になられている方はお分かりだと思いますが…死ネタですので苦手な方はご注意ください！！

永久の惜別、永久の恨み

どんなに思い返しても楽しかった記憶しかない。

そんな楽しい日々を私から奪つた貴方を……私は一生許さない。

【私は恨む、貴方の全てを・永久の惜別、永久の恨み】

人造人間達との生活を続けて…もう5年の月日が流れた。あつとい
う間だつたような気がする。最初はただの“暇つぶし”としてしか
私のことを見ていなかつた17号と18号。けど今は…

「あははっ、ホントに17号は心配性だねえ！！」

「つるさいっ！…返事が無かつたら誰だつて驚くだろ…！」

「…………めんなさい、爆睡して全然気付かなかつた…」

大切な家族。血は繋がつていなくとも、たとえ目の前に居るのが人
類最大の敵であつても…。私にとって、17号はお兄ちゃんで、1
8号はお姉ちゃん。

街を破壊している2人はとても冷酷だけど…

「けど17号がこんなに心配するつて思わなかつた…」

「…………しゃ悪いか？」

「悪くないよ？むしろ嬉しいかな~」

「そりがよ」

「ホント…素直じゃないね、17号は…」

「つむかこだ、18号…」

アジトでこうして3人で居るときは…普通の人間と何ら変わらない
・人間以上に人間らしい愛情を私に注いでくれる。

ちょっと照れ屋で素直じゃなくて、意外と寂しがりやだけどとも
優しい17号。

言葉は粗暴でいつも17号を怒鳴つていてるけど、買い物が大好きで
とても頼りになる18号。

私はそんな2人が大好き。

「それにしてもどうしちまつたんだろうね… アイツ。」

「ああ、トランクスか？ そういうや最近、現れないな…」

「尻尾巻いて逃げたんじゃないのかい？」

「あれがそんな腰抜けに見えるか？ あれは…死んでも俺達を倒すこ
としか考えてないただの馬鹿だ。なあに、その内また顔を出すさ。
適当にその辺の街でもぶつ壊してたらな」

たとえこの2人が悪者でも。

何の愛情も注いでくれなかつた両親より…

「さ、こんなつまらない話はやめて出掛けよう！…リリィも行くだ
ろ？」

「うん、行く…」

「ほり、おいで。今日は私が連れてつてあげる」

「ありがとう…」

「…」

私はこの2人と共に過ごす方が幸せだ。

ずっと一緒によう。

そう約束した。

「そうだ、リリイは欲しいものがあるって言つてたな。何が欲しいんだ？」

「ふふつ、17号も18号も一緒に来てくれる？」

「私は構わないよ。最初からそのつもりだし…」

「俺もか？俺は遊びたいんだが…」

「もう欲しいものは決めてるの…！時間は掛からないから…ねつ？」

「分かつた、じゃあ一緒に行くか…！」

「やつたあ…！」

だからこれは、約束の形。

「欲しいものって…これが？」

「うん…！」

「へえ、指輪…」

「指輪つていっつよつ、これはリングだな」

私はお店でシルバーのリングを3つ手に取った。

「17号にはこれ

17号と同じ髪色の黒い石が埋め込まれたリング。

「18号にはこれ

17号と同じ髪色の黄色の石が埋め込まれたリング。

「そして私はこれ」

私と同じ髪色の赤い石が埋め込まれたリング。

石の色が違うだけで、おそろいのリング。

「ずっと一緒にやって約束のリング!! これだったら、2人が遊んでるときでも邪魔にならないでしょ?」

「へえ、そういうことだったのか…。型も石の色もいいじゃないか」「ふふっ、リリィは面白いことを思い付くな。けど私も気に入ったよ、ありがと!」

嬉しそうに笑う17号と18号。その笑顔が嬉しくて…

「えへへつ…おそろい…だねつ」

私もつられて笑顔になる。

やつぱり私にとつてこの2人は大切な家族。大切な兄姉。きょうだい

この2人が居てくれたら、他には何もいらない…。

だから…

「ずっと…一緒にいてね…17号、18号…」

「しようがないなあ。居てやるよ」

「安心しな、17号があんたを見捨てても私はずっと一緒にいてあ

げるから」

「み、見捨てるかつ……！」

「ふふつ、約束……ねつ？」

私たちはこのリングに誓いを立てた。

「ずっと一緒にだ」

「俺達は家族だからな」

「ありがとう、大好きだよ……。」

その後私はゲームセンターに行つた。“遊ぶ”と言つていた

7号も一緒に。そしたら18号が…

「あーっ……クソッ……思い出しだけでも腹が立つ……」

ぼろ負けしちゃつて……現在、絶賛ハツ当たり中。18号の手から出る氣弾が次々にビルを破壊していった。そんな様子を17号は呆れたように見つめている。

「18号つてゲーム苦手なの？」

「あの手のゲームはな。人間を刈り取るゲームは得意なんだけど……」

「17号、何か言つたかい！？」

「いや、何も……」

「18号の視線が怖い……。17号も引き攣つた笑みを浮かべてゐる。

普段は優しい18号も……怒ると本当に怖い。殆どは17号に向けた怒りなんだけど……その現場を何度も目撃している私は、心の中で18号だけは怒らせないようじつよじつと誓つている。

と、その時だつた。誰かが……私達のそばに来た。

藤色の髪の男の人……。17号達と同じように……空を飛んできた。ただの人間じゃない……？

「貴様らもこれまでだ……片付けてやる……！」

その言葉が……やけに耳に響いた。怖くて……17号の後ろに隠れる。17号は大丈夫、と私を安心させるかのように……そつと頭を撫でてくれた。

「……なーんだ、生きていたのかトランクス。」

トランクス……。

「17号と18号が“遊び相手”と言つていた人間の名前……。

「それにしても、お前ほど無駄な努力が似合つ馬鹿はいないなあ……」

ククツと17号は喉を鳴らして笑う。その瞳は冷たく、片方だけ上がっている口角も……いつもの優しいそれとは違う。敵を目の前にした時の17号を見るのは初めてだつたけど……不思議と怖いとは思わなかつた。むしろ、目の前にいるトランクスという人間の方がずつと……怖かつた。

いつかこの人間が…私から全てを奪つてしまいそうだ…。

「貴様らに聞きたい事がある。貴様らの元にリリイといふ女の子がいるはずだ。何のつもりか知らないが…解放しろ…！」

トランクスという人の口から私の名前が出て…思わず目を見開く。どうしてこの人は私の事を知ってるの?この人に私は連れていかれるので…?

やだ…やだよ…!!

「いやつ…!!」

「馬鹿ッ、リリイ!!俺の後ろに居ろ…!!」

「君がリリイちゃんか?怖かつただろう?…むつ大丈夫だ、さあこっちへ…!!」

何で?何で行かなきゃいけないの?

「いやつ…!!私は17号と18号のそばから離れない…ずっと一緒に約束した!!家族だもん…!!ずっと一緒にだもん…!!」

必死に17号にしがみついてそう言つと、トランクスという人は少し困ったような表情を見せた。誰に何を言われたかしらないけれど私は何があつてもこの2人から離れるつもりはない。

「チッ…!!もうあつさつ殺つちやつていいだろ?鬱陶しいからさ…!!」

さつきからイライラしていた18号はトランクスという人を鋭く睨

みつけていた。一瞬、私と18号の視線が合った。その瞳は驚くほど優しく…

“大丈夫だから”

そう物語ついていて。だからこそ…余計に不安になつて。止めたいけど…止める前に…

「遊びが一つ減つてしまつが…まあいい。好きにしろ、18号」

17号が笑いながらそう言つてしまつた。

大丈夫?本当に?

約束したよね?

ずっと…ずっと一緒に…?

「17号ツ…」

「大丈夫だつて、18号がそう簡単にやられるわけ…」

と、その時だつた。

ドオオオン…!

凄まじい爆音。立ち上がる土煙。

けれど私も17号も…その瞬間を見てしまった。

「18号が……たつた1発の氣弾で……

「なつ……？ま、まさか……おい、何をしたんだ！？18号がお前
『』ときた……！」

17号が凄く焦っている。こんな17号見た事が無い。

私が知っている17号はいつだって意地悪で、素直じゃなくて、少し心配性で、けど……とても優しくて。

私の大切な兄ちゃんで。

17号にとつて18号は大切な双子の片割れで、私にとつても大切な姉ちゃんで……。

混乱して……私、自分が何を考えてるのか……分からぬ……。

「今のは殺された仲間の……」

焦る17号をよそに、トランクスという人は低い声でそういう言いながら、手に光を溜める。

「17号！……逃げよう！……ねえ、18号だつてまだ大丈夫だよ！……
早く18号を連れてアジトに戻ろう！……ねえ、17号！……」

一生懸命17号に縋つて、ここから逃げようと言つた。そうしないといけないような気がした。

あの氣弾を見た時から、そして今……あの人の手に集まっている光の

弾を見た瞬間から。

逃げなければいけないと……私の本能が警鐘を鳴らしている。

「リリイイ……」

「17号……、お願いだから逃げようよ……！」

悲しげに私の名前を呼ぶ。いや……そんな声で私を呼ばないで……？

そんな……

「お前は、俺達の自慢の妹だつたよ……」

最期のお別れみたいなこと……言わないで……？

「リリイイ、舌を噛むなよ……！」

「えつ……？」

「なつ……？貴様、何を……！？」

突然、私の身体が宙に浮いた。そして……

「お前は生きる。どんな事があつても……俺達の分まで……」

その言葉を最後に、私は18号の元へと投げ飛ばされた。

「キヤアアアツ……！」

あまりの衝撃に思わず叫んでしまったけれど……それよりも……

「ツ……！」

田に飛び込んできた、18号の姿に……絶望した。

「18号……？」

「……リ、リリイ……」

「18号……！」

まだかるべじて18号は生きていって、それが嬉しくて……。けど……私の不安は消えなくて。

「18号……大丈夫、すぐに17号があいつをやつづけてくれるから、そしたらアシストに帰らひづへ。そして……そして……！」

ただひたすら18号に話しかけていた。18号が眠ってしまわないように……一生懸命に。そつと握られる18号の手はとても温かくて……。

「泣くんじやないよ……リリイ……」

「18号……」

涙が溢れた。

「あんたに……こころと、教えて……あげる」

苦しい筈なのに……その表情はとても穏やかで……

「17号が、赤い色……好きな理由……」

「何？教えて、聞きたい！……」

知ってるよ？血の色だからでしょ？ナビ18号と話せるなら何でも

いい……

「リリィの……髪の色、だから……だよ……」

「……え……」

それは……私の知らない事実。

だつて……赤い色は血の色だから好きなんだつて、17号が自分で言つてた。

けど思い返せば……その時の17号の瞳は驚くほど穏やかだったような気がする……。

「あいつ、素直じゃ……ない、からね……。ホントの、理由は……ッ、あんたの……事、が……す、き……だから……、か、ぞ、く……か……ら……」「や、18号……しつかりして、ねえ18号……」

「……リ、こ……」「ぬ

「いや、嫌だよ……謝らないでよ……一緒にいようよ……」

「…………」

「……18号……？」

18号の最期の言葉は謝罪の言葉。18号の腕から力抜けでぱたりと地面上に落ちていった。

強くてかつこよくて、きれいだった18号。洋服選びが上手で、いつも私の為に洋服を持って帰つてきてくれた優しいお姉ちゃん。

「お、きて……18号……、起きて……」

一生懸命……何度も何度も呼びかけたけれど……

“ どうしたの、リリイ？ また洋服が欲しいのかい？ じゃあ今度遊びに行つた時に、持つて帰つてきてあげるよ……”

いつものように優しく笑つてくれない。

ゾッとした。初めて感じた……死の恐怖。

両親の死の時には微塵も感じなかつた……誰かを失うと言ひ恐怖。

「 17号！ ！」

お願い、神様……！ せめて17号だけは……17号だけは助けて……

私の大切なお兄ちゃんなの……！ ！

悪い事、たくさんして來たけど……私にはとても優しかつたの……！ ！

だから……！ ！

「 そして今度は……」

やめて……お願い、やめて……！ ！

「 悟飯さんの仇だアアアツ……！」

やだ……やだ……！ ！

「 17号……ツ……！」

私はただ…名前を叫ぶことしか出来なかつた。ただ目の前で…唯一の“家族”が消えていくのを見ている事しか出来なかつた。

「あ……あ……つ……！」

「17号……！」

“どうした？まだお前のお菓子食べた事怒つてるのか？”

怒つてない、怒つてないから…

お願いだから…

“ほら、帰るぞ”

独りにしないで…つ…！」

17号の身体が地面に落ちていくのが…私の眼にはスローモーションに見えた。一瞬だけ…17号と目が合つた。

その瞳は…いつも優しい17号の瞳で…

“悪いな…”

まるでやつていいやつているかのようだつた…。

「…………17号…、18号…ツ…」

家族が…いない…。

兄姉がいない…。
きょうだい

私は… 独りだ…

「リリイちゃんだね？君の事を心配している人がいる…。君の街の住人だ。さあ、もう奴らはいない。怖がる事はないよ。俺が送つて行つてあげるから…」

こいつに… 全てを奪われた…。

「人殺し」

自分でも驚くほど低い声。ぐるぐると渦巻く怒り。17号におやつを取られた時とは違う…怒り。

「人殺し、人殺し、人殺しツツ！…」

「なつ…！？」

キッと私はそいつを睨んだ。そいつは驚いたように私を見つめていたけれど…そんなこと、私には関係ない。

「どうして…？どうして私の家族を奪ったの…？どうして…？17号を…18号をつ…！！私の優しいお兄ちゃんとお姉ちゃん…！！返して、返してよ…！！」

私は拳を握り、そいつのお腹のあたりをひたすら殴り続けた。17号と18号を殺した男にこんなものが通用しないことぐらい分かっていたけれど…それでも私のこの怒りは治まらない。

私は初めて…“人を憎む”ということを知った。

「…………」

目の前の男は、ただ黙つたまま…私のされるがままになつてこる。それがまた気に食わなくて…思いつきり、男を突き飛ばした。少しだけ男の身体がよろけたけど…それを無視して、私は17号の元へとおぼつかない足で向かつ。

「17号…17号…」

ねえ…ホントに…

死んじやつたの?

「17号…強いんじやなかつたの?こんな遊びじやなかつたの?いつでも勝てるって…毎日言つてたじやない…!!18号も…毎日ゲームだつて言つてたじやない…!!」

17号も18号も…

わつ、いないの?

「約束…したじやない…」

17号の指にはめられた…今日私が送つたシルバーリング。

17号のコングに誓つたはずなのに…

ずっと3人一緒に…約束だつて…言つたはずなのに。

たつた数時間で……

その誓いは、脆くも崩れ落ちてしまった。

私が贈った赤いスカーフが風になびいて揺れる。そつとそのスカーフを解き、17号の指からリングを抜き取つた。

そして再び18号の元に戻つて……同じように、私が贈つたりングを抜き取つた。

ずっと……一緒に約束したよね……？

だから……

「私も殺して

「なつ！？君は何を言つているんだ！！」

「聞こえなかつたの？私も殺してつて言つてるの。私はこの人達の仲間……。血は繋がつていないけど、2人は私のきょうだい兄姉きょうだい。だったら私も貴方の敵でしょ？だから……私も殺して。こんな……誰も私の事など愛してくれない場所で独り生きるくらいなら……」

死んだ方がマシ。

真つすぐと……2人の敵だった男を見据えてそう言えば、驚愕の眼差しで私を見つめていた。だが、その瞳はすぐに鋭く私を見つめる。

17号とは違う……瞳。

同じきつい目つきなのに、17号のそれの方が優しく思えてしまつ。

そんな目で、私を見るな。

「俺が憎いか？」

目の前の男は、私に聞く。

「憎い」

私は即答した。憎いに決まってる。唯一の家族を私は目の前で奪われた。憎くないわけがない。

「俺も君と同じくらい、2人の人造人間が憎かつた。大切な師匠を殺された。それに、関係の無い人々を無差別に殺していった。そんな奴を野放しにしておく事など俺には出来なかつた。」

「何も知らない癖に！あんたは何も知らない癖にッ！17号も18号もッ……！」

“さ、出掛けよー！今日も可愛い服が見つかることいねー！”

“ほら、俺の肩にしつかり掴まつていろよ。落ちても知らないからな？”

「凄く……凄く優しかったッ……！」

パタパタと流れる涙は、悲しいから？それとも悔しいから？

どつちなんだら？それすらも分からぬ。

「俺が憎いなら、俺に付いておいで。」

「なつ！？」

「嫌だ、何で…こんな奴と一緒に付いて行かなきゃいけないの！？」「1号と18号を殺した人殺しになんか…！」

「嫌だ…！お前だけは許さない…いいから私を殺して…！」
「殺さない。君は殺さない。俺が憎かったのは…倒さなければならなかつたのはあの2人だけだ。」

「つ…！…じゃあ、私は自分で死ぬ…！」

「いいのか？君の家族を殺した俺は…ずっと、生き続けるんだぞ？君は悔しくはないのか？」

言われて…また、涙が零れた。

「悔しくないわけがない。悔しくて、憎くて…私に力があるならば、今すぐにでも…殺してしまいたい…！」

「俺に付いてくるのが嫌ならそれでもいい。だがもし俺が憎いなら…生きて、いつか俺を殺しに来いで。それで君の気が済むなら…。だから、俺を殺せるほどの力が付くまで、君は生きるんだ。」

「ッ…！」

すぐにでも殺したい、けれど…今の私には無理だ。

だつたら…

「殺す…！…絶対に2人の仇を私が討つ…！強くなつて、そして…
そして…！」

「ああ、待つているよ。」

17号に言われた通り…2人の分までしつかり生きて、強くなつて
いつかきっと…この男を、私の手で…。

男は最後に悲しそうに微笑んで、その場から去つて行つた。

残されたのは…私と、動かなくなつた17号、18号の3人だけ…。

「…………」

突然襲つてきた孤独感。

私は、生まれて初めて…

「うわああああ
ツツツー…………」

声を上げて…泣いた。

この日私は初めて知つた。

死とは…永遠のお別れという意味なのだと…。

* * * *

ただ…俺は全てを終わらせたいだけだった。捕らわれている少女を助けて、悟飯さんの仇を討つて…。それだけが全てだった。

だが、その助けよとした少女に…

“人殺し”

憎悪の目と、罵声を浴びせられた。

てっきり俺は、人造人間に誘拐されて…逃げられずにいたのだと思っていた。だが彼女は…あの人造人間達を慕い、“家族”として…共に過ごしていたんだ。

“あんたは何も知らないくせにッ…！”

脳裏を過ぎた先程の彼女の言葉が、やけに耳に響く。そうだ、俺は人造人間のことなんて何も知らない。倒すべき敵…ただそれだけだった。

けどあの子にとつては…2人の人造人間は唯一の家族…だったんだ…。

「…過去の人造人間達は…この世界の人造人間ほど非道ではなかつた…」

それは何故なのか分からぬ。もしかしたら、セルや俺の介入で未来が変わってしまった影響かもしね。

しかし本当に……「」の世界の人造人間も、ただの非道な奴らだったのか？

“凄く……凄く優しかったッ……！”

少なくとも、彼女には優しかったのだろう。18号に『氣弾をぶつける直前のあの言葉…

『貴様……リリイに何かして『』らん……地獄の底から這い上がりでモアンタを殺す……！…』

あれはまさに、妹を守る姉の姿そのものだった。

17号を破壊する直前もそうだ。

『フツ……リリイとの約束……守れなかつたな……』

その切なげな表情は、妹との永久の別れを悲しむ兄の姿そのものだつた。

とても……今まで殺戮を楽しんでいた“人類の敵”とは思えないような姿を……人間らしさを……あの2人は最期に見せた。

「…………」の時代も…

人造人間達と彼女がどこでどのように知り合つたのかは分からぬ。

けれど…

「もしかしたら、こんなことにはならなかつたのかもしれないな…」

もう少し、人造人間達と彼女の出会いが早ければ……この時代の未来も変わっていたのかも知れない。

「人殺し、か…」

初めて言われたその言葉。少女の瞳は憎悪に染まり、涙を溜めて…俺を睨んでいた。

俺にとって、人造人間はただの殺戮を繰り返す…それこそ“人殺し”だった。

だが、その人造人間達を慕つていたあの子にしてみれば…俺も立派な“人殺し”なのだろう。

殺してくれといわれたときはゾッとした。その瞳はとても幼い少女のものとは思えない色をしていたから。全てを失い、独りとなつて…生きる希望を無くしてしまった彼女の今後を思うならば…そうするべきだったのかもしれない。

だが…俺が殺した2人の人造人間はそれを望んではいなかつた。

彼女が死ぬことではなく…生きることを望んでいた。

だから俺は、卑怯な方法で彼女に生きる希望を与えた。

それは…俺への復讐。

それが間違ったことだというのは百も承知だ。復讐からは何も生まれない。今回のような…更なる悲しみを生むだけだ。

だが、それでも…

「君は生きなくてはならないんだ…」

俺を憎み続けることで、君が生きていけるならば…。

去つ際に、痛いほどに叫び声が聞こえてきた。あの子の声だ。

「う……」

俺は正しことをしたと信じたい。

けど…

幼い少女の心に深い傷を作ってしまったこと…

決して許されないこと。

これは、俺が永遠に背負つていかなければならぬ…十字架だ。

「ただいま、母さん」
「おかえり…」

俺こはこうして、出迎えてくれる家族がいる。

ああ、今あの子はどうしているのだろうか…？

絶望の淵で…何を思つているのだろうか…？

俺を恨むことで君が生きていけるなら…俺はどんなに恨まれても構わない。

待つていろよ…。

君が俺の元にやつてくるその日を。

俺を…“殺し”に来る、その日を…。

* * * *

誰も来ないような場所を選んだ。

先客がいるみたいだつたけれど…

「2人だけじゃ寂しいでしょ？人間なんかと一緒にじゃ、2人は嫌かな？けど…私はこの場所が好きだから…」

3人でよく来た場所。街が一望できるから好きだと…17号と18号は言つていた。街を一望つて言つても、殆ど壊れちゃつてるけど

…それを見るのが楽しいんだって、言つてたっけ…？

けどその2人も…もういない。

大きな大人の身体を抱えて、荒野とさつきの街を2往復して…

2人のお墓を作った。

「2人とも隣同士だよ？だから17号も寂しくないよね？」

17号は意外と寂しがりやだったから、寂しくないよう[18号]のすぐ隣にお墓を作った。そして木で作った十字架を突き立てる。

17号のお墓には私が以前に送った赤いスカーフを。

18号のお墓には私が選んであげた服を千切つた一部を。

今私のには…こんなことしか出来ない。17号も18号もただ私は2人に笑顔を向けていればそれだけで十分だと言つてくれたけど…

「無理…だよおつ…」

17号も18号もいないこの世界では…

「ふえつ…、ひつ…く…17、号…ツ、18号ツ…」…

笑うことなんで…出来ない…。

今は無理でも必ず強くなる。強くなつて、2人の敵だったあの男を

私が必ず倒すから。

それが…唯一、2人のために出来ることだから…。

少しだけ、私に時間をちょうだい?

17号は待つてるのが苦手だったね…? 18号もせっかちだったつけ…?

けど…少しだけ待つて?

絶対に強くなつて、あの男を倒して、そして…

「私も…2人の元に行くから…」

17号には生きろつて言われたけどね…。やっぱり…2人のいない世界でなんて…生きていけない。

全てが終わったその時は…私もそっちに行くから。

きつと17号も18号もたくさん私のこと怒ると憲つたけど…それも受け入れるから。

だつて…約束したでしょ…?

「ずっと…一緒だから…」

私の胸元には、3つのシルバーリング。

黒い石は17号、黄色い石は18号、赤い石は私。

それぞれの髪と同じ色の石が埋め込まれたシルバーリングを胸に下
げ

「私は……生きるよ……」

復讐を糧に、生きる決意をした。

きっとこの恨みは……生きている限り、消えることはない。

永久の惜別、永久の恨み（後書き）

人造人間サイドで小説を書いているから……なんかトランクスが悪みたいですね……（苦笑）けど、視点が変わるのでこうも見方が変わったんだなと思ったのも事実です！！17号と18号を慕つていたりリイちゃんにとつては、トランクスはまさに人殺しなんですよ……（苦笑）

次回がラストとなりますー！

さよなら（前書き）

最終章です！！人造人間達が死んでから5年…。5年の時を経て、
彼女は何を思つ…？

なんかトランクス夢みたいになつてますが…そのつもりは微塵もあ
りません…！！（笑）書いてるうちになんかそんな感じになつちゃ
つた^_^；私もトランクス、好きですかね…！！（笑）

さよなら

あの時はただ、2人を殺したあの男を恨むことでしか生きる意味を見い出せなかつた。

けれど今は……

【私は恨む、貴方の全てを・さよなら】

家族同然に慕つていた人造人間17号と18号の2人が、1人の男に殺されてから5年の年月が流れた。

私は今…西の都にいる。2人が破壊しつくした街並みは驚くほど綺麗になつていて…それが年月の流れを思わせる。私が向かつた先はこの西の都では…いや、この世界では知らない人はいないであろう有名な場所…“カプセルコーポレーション”。私が積年恨み続けてきた人が住んでいる場所だ。調べることは思いのほか簡単で、アジトに残つていたコンピュータのデータからすぐに宿敵の住まいが割り出せた。意を決して、インターホンを鳴らす。すると、ロボットが私を出迎えてくれた。

『用件ヲオ話シ下サイ』

「私の名前はリリイといいます。トランクスという人はいますか？」

「彼に話があります。」

『了解致シマシタ。少々オ待チ下サイ』

それから暫くして…

「……リリイちゃん……？」

「お久しぶりです」

「……“ちゃん”はもう失礼だね。久しぶり、リリイさん…」

彼が現れた。あの時と全然変わつていらないその姿。5年の歳月を思わせないその姿に少し驚いたけれど…そんな些細なことには触れず、单刀直入に本題を伝えた。

「今、お時間は有りますか？」

それだけで彼は悟ったのだらつ。

「大丈夫だよ。でも場所は、ここじゃない方がいい…かな？」

「そうですね…」

「じゃあ少し待つてもらえるかな？母さんに出掛けてくれるこ^トを伝えるから…」

すぐに「了解してくれて、その後私達は西の都から離れた場所へと向かつた。

向かつた先は…

「……は…」

「……17号と18号が眠る場所です」

2人のお墓の前。

何故?と彼の瞳が問いかけてくる。それは一体…何に対する問い合わせなんだろうか…?

「…」この場所…2人が好きだった場所なんです。ここからの景色が好きだつて…言つてました。自分達が破壊した街が一望できるから、つて…」

「そう、か…」

「だから、あの日…私は2人の身体をここに運んで、2人のお墓を作りました。」

ちらりと私は横に視線をやる。

「先客が…いたみたいですけどね…」

そこには…誰かのお墓。誰のお墓なのかはわからない。けれどよく花が添えられていた。きっと…ここに眠る人を大切に思っている人が来ているのだろう。

「」のお墓は…俺の師である孫悟飯さんのお墓だ…

突然の彼の言葉に私は驚いた。視線をやると、少し悲しそうに微笑んでいる。

「悟飯さんも好きだつたんだ。ここから見る街の光景が。あの頃はボロボロだつたけど…綺麗な頃は今と同じくらい綺麗だつたからね。そして俺達は2人で誓つたんだ。ここから見える街がいつか…以前のような綺麗な街に戻るようにに戦おうと…」

そしてその視線は、復興した街へと向けられた。

「おかしな話、ですね…。ここが好きなのは一緒に、好きな理由も一緒に…考え方まるで違うなんて…」

「そうだね…」

17号達は絶望に崩れ落ちる街を眺めるのが好きだと言っていた。この人たちは以前の綺麗な街並みを眺めるのが好きだと言った。

「それで…君は俺を…殺すのか?」

相変わらず視線は街を眺めたままだったけれど…彼の言葉は確かに私に向かっている。

そう…それは2人が殺されたときに交わした、彼との約束…。

“生きて、いつか俺を殺しにおいて。”

「約束…でしたね…」

「ああ…」

あの言葉が、あの時の私にとつては唯一の生きる希望だった。強くなって、2人の仇を討つことだけしか考えられなかつた。どうやつたら強くなるのか…幼い私には分からなかつたけれど、アジトいつもコンピュータを見ながら、彼と彼の仲間の戦う姿を何度も目に焼き付けた。

そして悟つた。

自分の力では勝てないと。

どんなに力をつけても、どんなに強くなつても……私の力ではこの人には勝てないと……幼いながらも私は悟つた。そして……絶望した。

大切な家族を殺されて、その仇討ちもできないなんて……。

何度も何度も悲観した。そのまま死のうと思つたことも何度もあつた。けれど、その度に“殺しにおいて”と言われたあの言葉が脳裏を過ぎつた。

「最初は……ずっと、貴方を殺すことしか考えていました。そうすることでしか、私は生きていけなかつた。けれどある日気付いたんです。私では貴方に勝てないと……。17号と18号が勝てなかつたのに、私が勝てるはずがないと……。そしたら無性に腹が立つて……。私はいつもここで泣いていました。」

たつた1人でアジトにいることが耐えられなくて。そんな時はいつもここに来ていた。雨の降る日も、雪の降る日も……。どんなに暑くても、どんなに寒くとも……。

「私にはここしかありませんでしたから……」

故郷の街はある。けれど……そこに私の居場所はない。

私にとっては……

「例え独りでも……私の居場所は……17号、18号と3人で過ごして……アジトだけだった……」

それから私は生きるために街に向かつた。子供にでも出来る些細な

仕事を見つけて、その日の食べるものを買えるだけのお金稼いだ。
そつやつて復興支援をしている時に…気付いた。

「どこに行つても…誰もがあの2人の死を喜んでいたんですね。世界
は平和になつたと…。」

それを聞くたびに怒りと、寂しさが込み上げてきた。

「そしていつだつて、その話の中心にいたのは…。」

私がずっと、憎んでいた…

「貴方でした。」

その時に気付いた…。

気付いてしまつた。

「やつぱり…2人は恨まれて当然の事をしてしまつたのだと…。
滅びなければ…ならない存在だったのだと…。」

認めたくはなかつた。だつてたつた3人きりの家族だつたんだもの。
けれど…人々はそんな彼らの優しさを知らない。

その姿を知つているのは…私だけだから。

「認めたくはなかつた…けど、認めなくてはならない真実…。」

その時からだつただろうか…？

「私は、一生この恨みは消えないものだと思つていました。けれど

…」

人々と触れ合う回数が増え、私が少しづつ心を開き、たくさんの人と話すうちに…

「不思議と…穏やかになつていったんです。ただ貴方を殺すためだけに生きていたはずだったのに…いつの間にか私は、貴方を殺すためではなく…死んでしまったこの2人の分まで生きようと…それだけを考えるようになつたんです。」

ドロドロとした憎しみは溶け、ただ純粋に2人の為に何が出来るかを考えた。

その答えが…“2人の為に生きる事”だった。

彼を見ると、決して私から目をそらすことなく…その瞳は真っすぐと見据えられている

とても強い瞳。あの時はこの瞳に見つめられるのがとても嫌だった。殺してしまいたいほど恨んだ相手だった。

けれど…

「あの時、間違っていたのは私だつたんです。そして、ここに眠る…2人だつたんですね…」

人々の優しさに触れた時、感じた事は。

「この2人は…奪つてはならないものをたくさん奪つてしまつたんですね…」

あの日私がこの2人を奪われた時と同じように…、この2人に大切な者を奪われた人がたくさんいるということ。

幼い私にはそれが分からなかつた。

だからこそ、私は彼を恨むこと…現実から目をそむけていたんだ…。

「もし私が両親を愛していたなら、きっと…両親を殺したこの2人を恨んでいたでしょう。けれど愛を知らなかつた私にはそれすら出来なかつた。それどころか、両親の仇であるこの2人にたくさん愛をそそいでもらつたから…」

だから、気付く事が出来なかつたんだ。

この2人が世界の敵で、本来なら私なんかが一緒に居てはいけなかつたのだと。

「あの日、私は貴方を“人殺し”と罵りました。」

目の前で大切な人を奪われて、思わず言つてしまつた言葉。けれどそれは、その当時の私の本心。

けれど、今は違う…。

「……ごめんなさい…」

「え…?」

静かに私の話を聞いていた彼は、突然の謝罪に驚いたように口を見開く。

「あの日の、貴方の行いは間違つてはいなかつた。貴方は正しい事をしたんです。なのに、私は…貴方の行つた事を否定した…。本当に、「ごめんなさい…」

そして…

「ありがとうございます」

「…どうして…？」

困惑した彼の声。どうして私がお礼を言うのか…分からぬわよね

…？

17号と18号も分からぬかな…？

けど、これが…今の私の本心…。

「あの時、17号と18号を止めてくれて…ありがとうございます」
た。もし貴方がいなければ、2人はずっと誤った道を歩み続けていたと思います。そして私はそれを止めることなく、それが当たり前だと思っていたと思うんです。」

あの当時、破壊行為を“ゲーム”や“遊び”と言つて楽しんでいた2人。私はただそれを見ているだけだった。欲しいものを手に入れるために、破壊して…お店から物を持って帰る…そんな事を繰り返していた。

それは立派な犯罪だ。私は分かつてはいたはずなのに……それを止める事をしなかつた。

2人の過ちを、形はどううであれ……止めてくれたのはこの人だつた。

「だから……ありがとうございます……」

「……、君は随分と大人になつたね……」

「そうですか？私はまだまだ子供ですよ。だつて……」

いまだに、アジトで一人……夜中に夢を見ては泣く日があるんですから……。

そう言えば、彼は切なげな表情を見せる。

「あともひひとつ、貴方にお礼を言いたい事があるんです。
「もうひとつ？」

これは……本当に大切なことだから……。

「私を、生かしてくれてありがとう……」

「…………」

「あの時、もしあの言葉が無ければ私は……」

“ 生きて、いつか俺を殺しにいで。 ”

「きっと、あの場で自ら命を絶つていたでしょう。」

きっとこの人は分かつてはいたんだ。だからこそ、あの時……あんな事

を言つたんだ。

「貴方は分かつていたんですね？私が…放つておけば死んでしまうつてこと…」

「…ああ、すぐに分かつたよ。君がどれだけ2人の事を大切にしていたのかは…見ていて分かつたからね。卑怯な方法だと思ったけれど、君から生きる希望を奪つてしまつたのは俺だ。だから…だつたら俺を恨むことで君が生き続ける事が出来るならばそれでいいと…そう思つた…」

それに…と、更に彼は続ける。

「17号も18号も君が生きる事を望んでいたからね…」

「えつ…？」

「最初に18号へ氣弾をぶつけようとした時…言われたよ。君に手を出したら地獄の底から這い上がつても俺を殺しに来ると。そして17号は…君との約束を守れなかつた事を悔んでいた。あの時の2人の言葉と表情は…今でも忘れられないな…。その時の2人は…まさしく、君の姉と兄の顔…そのものだつた。」

2人とも…自分の事よりも私なんかの事を…？

「だから、何をしても君だけは生かさなくてはならないと思つたんだ。それが…この2人へのせめてもの償いだと思つたから…」

「償い…？」

「君と2人は何か大切な約束をしていたんだろう？」

言われて、私はハツとする。

2人がこの世から去る数時間前に交わした約束…。

私の胸に光るシルバーリングに誓つた…

“ずっと…一緒にいてね…17号、18号…”

「はい…」

「その約束を、俺は君達から奪つてしまつた。だから…せめて君だけはどんなことしても生かしてあげたかったんだ。まあ…俺のエゴかもしかれないけどね」

苦笑する彼に、私は首を横に振つた。

「約束は…まだ守られていますよ…」

2人はもう居ないかもしない。けれど…

「貴方が2人を葬つたあの日、2人がこの世を去る数時間前に…この3つのリングに誓いを立てたんです」

私の胸元にはチエーンに通した3つのリング。

黒い石は17号。

黄色い石は18号。

紅い石は私。

それぞれの髪色の石が埋め込まれたシルバーリング。

「ずっと一緒にいよう、って。確かに2人はもう居ません。けれど

…その思いは形となつて…今も、ここにある…「

もう5年の歳月が経つのに…いまだこここの石たちは輝きを失わない。それどころか、まるで生きてるかのようにキラキラと輝いている。

「だから、約束は現在進行形で果たされているんですよ?」

「そうだよね…17号、18号…?」

「君は強くなつたね…。もし俺を恨んだまま強くなつていたら…俺は本当に殺されていたかも知れないな」

「それはどうでしょう?私は非力なただの人間ですよ?貴方は“サイヤ人”なんですね?」

「どうしてそれを!?」

「2人を誘拐して改造を施した“Dr・ゲロ”という人物が残したデータに残っていたんです。あの日の貴方と同じように金色の輝きを身にまとつた戦士達が戦つている映像が…。」

その輝きはあるで、世界を守る守護神のようになら見えた。

「私みたいな…汚れた思いで貴方に立ち向かつても…きっと勝てなかつたでしょう。それに、例え貴方を憎しみのままに殺してしまつたとしても…私はきっと、後悔したと思うんです。」

「だって…

「あの日、2人を殺した後に去り行く貴方が見せた微笑みは…後悔の色でいっぱいでしたから…」

あの時は自分の事ばかりで、何が可笑しいんだと思った。けれど、

今は…違つ…。

「貴方はあの日…気付いたんですよね…？憎しみからは何も生まれない事を…。更なる悲しみしか生まれない事を…」

彼はあるの日、笑っていたけれど…本当は泣いていたんだ…。

「皮肉なことに…ここに眠る2人から教わったよ。宿敵だった2人にね…」

きつと、あの日の私の姿を見て…気付いたんだ…。

「そして思つたよ。戦い以外の方法で…解決は出来なかつたのかと。別の次元の17号と18号は…この世界の2人ほど残酷ではなかつたからね」

「別の…次元…？」

そこで不思議な言葉を発した彼に首を傾げて聞けば、隠すことなく教えてくれた。

この世界よりも遙か過去の世界にタイムマシーンを使って行つた事。そこで17号達と出会つた事。

この世界とは違う戦いが起きた事。

そして…

「きつと、あの次元の2人は君がよく知つてゐる2人に一番近い姿だと思つ」

その2人は殺されることなく、生きているといふこと。

「そう、ですか…」

次元は違うけれど…2人は生きている。

「よかつた…」

例え別の次元でも…
決して、会う事が叶わなくても…

「生きててくれて、ありがとう…」

生きているならば…私はそれだけで十分だ。

もしかしたら、このリングの石たちが輝きを失わないのは…別の次元の2人が生きているからかもしない。そう信じたい…。

「それに18号は結婚もしているよ。子供もいる。お祝いを言いに行つたら“そんな暇があつたら自分の世界の復興に時間を費やせ”って追い返されたっけ…」
「け、結婚!? 18号が!…?」

とんでもない爆弾発言に思わず声を荒げてしまった。

「へ、へえ…あの18号が…」

ああ、どうしてだろう…安易に想像ができちゃうな。

旦那さんが18号に怒鳴られて必死に謝っている姿が。けれど、18号が困ったように笑いながら…

“つたぐ、しょうがないね……”

そう言つている姿が。18号は怒ると怖いけど、本当はとても優しいから……最後はいつだつて許してくれる。

「あのつ、17号は……？」

「17号も生きてはいるんだけど……所在は18号も分からなって言つていたな。心配していたよ、怒りながらね」

「怒りながら心配ですか……。18号ひしげな……」

きっと17号が会いに行つたら怒鳴られやけりやけりだらうな。びびりて顔見せに来なかつたんだい……つて……。

「そして、君にも会つたよ。」「

「私……ですか……？」

別の次元の私……。

別の次元の私は……幸せなのだろうか？

「偶然だつたんだけどね。俺があちらの世界の仲間達とモールに買い物に出かけた時に……『両親と一緒に買い物に来ていたんだ。笑つていたよ、楽しそう』……」

ああ、別の世界の私は……幸せなんだ……。

「ちやんと、両親に愛されてるんですね……。」

この世界では、貰えなかつた両親からの愛情。けれど、別の世界の私はそれを貰つている。

「少しだけひやましこな…」

17号や18号と出会えていない事は残念だけれど……両親から愛情を注いでもらつてこゐなら……それでいいや……。

丁巳

ああ、こんなに穏やかな気持ひになれたのはじれくらいぶりだらう

「お話」

「お話を聞かせてありがとうございました。トランクスさん…！」

「…アーリー…。生きてこてくれて、ありがとう…ココイセん…」

この人に…トランクスさんに会つ事ができて、お話をすると感じが出来て…よかったです。

* * * *

「これから君はどうするんだ? 何だつたら、カプセルコーポレーションに来ないかい? 今、人手不足で社員の募集を出してるんだけど

- 1 -

暫く話した後、そろそろ家の方が心配だからとトランクスさんは立ち上がった。そして…私に言ったこの言葉。何でも食事付きで、部屋もあって…住み込みで働けるらしい。給料も聞いた限りでは、今まで私が働いてきたどこよりもよかつた。さすがは世界のカプセルコーポレーションだわ。

けど…

「嬉しくお話をすけど…お断りさせていただきまわ」

私はその申し出を断つた。

「何故?」

トランクスさんはそう聞いてきたけど…答えは分かっていると…その表情が物語つていてる。

「…だって、貴方と私は…敵同士ですよ?」

だからちょっとだけ意地悪してみた。昔17号がしていたように、片方の口角を上げて笑つてみせると…トランクスさんは少し驚いたような表情を見せる。けどすぐに笑い出した。

「そうだね、俺と君は敵同士だったね。忘れていたよ」

その笑顔はとても優しい。

「それに、私には…帰る場所がありますから…」

その場所はもう、私一人しかいないけど……それでも、唯一…17号と18号が居たのだと証明できる場所であり、今でも2人の温もりを感じる事が出来る場所である。

「私はあの場所を離れたくないんです」

例え夜に泣く日があつても。

あの場所から…離れたくはない。

「君ならやうづ言つと思つていた」「やつぱり、分かつていましたか?」「ああ」

けれど、その気持ちは嬉しかつた。

「トランクスさん、ありがと「う」わいました」「いや、いいんだよ。俺も…君と会えて、そして話す事が出来てよかつた」「私もです」

微笑みながらやうづ言えば、トランクスさんも優しく微笑む。

「君は笑つている方が素敵だよ、リリイさん…」

思いもしなかつた言葉に、凄く驚いたけれど…

「残念、その手の口説き文句には乗りますよ? 18号からよく言われていましたからね…。そういう男ほど、最低だつて!…」

「…まいつたな…」

本当は……とても嬉しかった。

いつも不安だつたから。ちゃんと笑えているかなつて……。

17号と18号は私に“笑っていてくれればそれでいい”って言ったから……。

ずっとね、2人が居なくなつて…私は笑えているか不安だつたの。

けど私、笑つているんだね……。

「それじゃあ…俺はこれで

「はい」

差し出された手は握手を求めるもの。私は迷うことなく、その手を取つた。

「また会つ事は出来るかな?」

「……私はもう、トランクスさんに会つもつはりはありません……」

「敵だから?」

「さあ、どうでしょ?」

そう言つて笑うと、彼も困つたように笑つていた。

「会つてしまつたら、私はまた依存してしまいそうだから…。感情が欠けていたとはい、私は身内が目の前で死ぬのを2度見ています。」

一度目は両親。その時は悲しさの欠片もなかつた。

2度目は血のつながりはなかつたけれど……大切な兄姉^{きょうだい}。その時は深い絶望を味わつた。

「誰かと共に生きて、誰かが離れていくのはもう……見たくないから……」

「そうか……」

だから私は決めたんだ。これから先はずつと一人で生きていくこと。

「だから誰にも頼らず、私は一人で……自分の道を歩みます。だから……これでお別れです。」

「分かったよ。」

握られた手はとても温かく、放すのがなごり惜しくなつてしまつ。

けれど……ここからが新たなスタート。

「私……決めていたんです。」

「何を……？」

「貴方に会つたら……死のうつて……」

「なつ！？」

“あの日の私を殺そつ”つて……そして……

パツとその手を離して私は両手を広げる。天を仰いで……思いつきり叫んだ。

「私は今日……生まれ変わるの……！」

きつかけが欲しかつた。

あの時の私と決別するきっかけが。

そのきっかけに私は…トランクさんを選んだ。

「だから今日が過去の私の命日で、今の私の誕生日…」

笑いながらそう言えば、トランクスさんも笑っている。

「驚かさないでくれ…。まったく、君は誰に似たんだ…？」

「さあ、誰でしょうね？兄は17号で、姉は18号でしたから…両方かも？」

「ははっ、だつたら最強だな」

「そうかもしませんね！！」

ねえ、17号…18号…？

私はこれから笑いながら、2人の分まで生きるから…見守っていてね…？

「じゃあ、リリイさん……ちょっとなら……」

「さよなら、トランクスさん」

きっとこれが最初で最後の再会。

この人に…トランクスさんに会つ事はもうないだろ？

「行つちやつた…」

飛び去つて行くトランクスさんを見送りながら、2人のお墓に向き直る。

「大丈夫、私…頑張るから…！…だから、見守つていてね？」

2人のお墓に手を乗せて、ゆっくりと扉を閉じる。

今、2人が目の前にいたら…何で言つてくれたかな？

“ しようがないな。見守つてやるか… ”

“ 安心しな、私たちはずっと一緒にだよ ”

そう言つてくれたかな…？

「 ……お隣は… 2人の宿敵のお墓だったんだね…」

ふと視界に入ったのは、さつきトランクスさんがお話していた彼の師匠という人のお墓。名前は確か…孫悟飯さん。花が供えられていたのは…さつきとトランクスさんが時々来ていたからなんだろうな…。

「 2人のせいで、貴方は命を落としてしまったんですね…」

お墓の前に立ち、私はそつとそのお墓に両手を合わせる。

「 兄と姉が…迷惑をおかけしました。そしてトランクスさんには…本当にお世話になりました。貴方のお弟子さんは、本当に強い人です。 」

力も、そして…心も。

「 きつと貴方も強かつたんですね…。だから、トランクスさんはみんなに強くあり続ける事が出来たんだわ 」

何度も負けても、その度に立ち上がりて…2人と戦う事が出来たんだ。

「…………そろそろ、私も帰ろうかな…」

帰つて夕食の準備をしなくちゃ…。

「それでは…また来ますね? 17号と18号も…また来るね…」

私はそこに眠る3人にさよならを言つて、その場所を後にした。帰る場所は3人で過ごしたアジト。

今は私だけだけど…

大丈夫、いつだって…

“ おかれり、遅かつたな?”

“ おかれり、さあ夕食だ。リリイ、手伝つてよーー!”

「 ただいま…」

一緒にだから…。

過去の私に。

さよならを言った。

そして、もう一度と会つ事が無いであろうトランクスさん。」

「… また、会つちゃいましたね…」

「やうだね…」

もう一度と会つ事はないでしょう、なんて言つたけど…

大切な人のお墓が同じ場所にあるんですもの…。

「ふふ…」

「へへ…」

「「あはははははははは…」」

“一度と会わない”なんてことは無いんだわ。

運命の悪戯かしら？

けれど…

「トランクスさん、」の後お時間ありますか？」

「ああ、大丈夫だけど…」

「お話、聞かせて下さい…。あらひの世界の17号、そして18号の話を…。主に18号の話を…」

「気になるんだね？」

「ええ、凄くーー！18号が結婚するなんて夢にも思つていませんでし
たからーー！旦那さんが大変じゃないかなーって…話を聞いてからず
つと思つていたんですよ…！…！」

「ははっ、確かに…彼女の旦那さん…クリリンさんという人なんだ

けど、大変そうだったよ…いろいろ」

「ああ、やつぱりーー！けど18号、怖いけど凄く優しいんですよ？
17号にはいつも怒鳴つていたけど、私には凄く優しくて…」

「こんな素敵な時間が過ぐせるならば…

こんな運命もいいかもしれない…。

* * * * *

久々に訪れた過去…。父さんと母さん挨拶を済ませて、俺はある
場所に向かつた。

「ここにちは、お久しぶりです」

「おお、トランクスじゃないかーー！今日はどうしたんだ？」

「俺の世界も随分復興が進んできたので、その報告に…」

「そつかーー！おーい、18号ーー！トランクスが来たぞーー！」

「トランクス？あのチビ、さつさ帰つたばっかりなのにまた来たの

?」

「いや、そつちじやなくて…」

「やあ、18号」

「なんだ、でかい方のトランクスかい。元気でやつてんの？」
「おかげさまで」

そこはクリリンさんと18号が一緒に暮らしているカメハウス。今日の目的はさつきクリリンさんに言った“仲間達への復興報告”もだけれど…。

「18号に頼みがあるんだ。」

「私に？」

「クリリンさんと…それからアーロンちゃんにも手伝ってほしいんですけど…」

「ん？これって…」

「カメラ？」

「ええ、3人の写真を撮りたいんです。いいですか？」

「俺は別にかまわないけど…」

「私もいいけど、そんなものどうするの？」

トランクスは少し困ったように笑いながら…

「俺の世界に、18号の妹がいるんだよ。こいつの世界の18号は結婚してるって話したら…凄く心配しててね。…田那さんの方を…」

「い、妹！？18号、お前妹がいたのか！？」

「私に妹なんていないよ？トランクス、あんたの世界の私には17号以外にも姉妹きょうだいがいたのかい？」

「いや、血は繋がっていないんだけど…妹同然に可愛がっていた女の子がいたんだ。それで、こちらの世界では生きていると話したら、幸せな姿を見たいって言つから…」

そういうてカメラを構えると、やれやれと「8号」は溜息を吐いていた。けど…どこか楽しそうで。

「妹か…。トランクス、あんたまたこっちに来る事あるの?」「一応、今後も顔を見せに来るつもりではいるけど…どうして?」「私の妹、見てみたいじゃないか。そっちの写真も持ってきてよ。」「分かった、今度来るときに持つてくる。わざと喜ぶな、リリイさん…」

「トランクス〜!! もしかして、お前の彼女か?」「ま、まさか…!! 彼女にとって俺は仇ですか…!!」「じゃあなんでそんなに親しいんだい? 私の妹だつたら、『アンタの事を殺す!!』ぐらい言ってのけてもおかしくないだろ?」「ははっ、そんな時期もあつたけどね…」

彼女はそれを乗り越えた。

恨みを糧にするのではなく…

「今では良き友、つてところですよ」

純粋に、死んで逝った兄姉の為に…

「じゃあ、撮りますよ?」

「あ、トランクス!! その子こそ、18号はとんでもなく怖いけどいい奥さんだからって伝えておいてくれ…!!」

「クリーン!! とんでもなく怖いってどうこいつ意味さー?」「そういうところがだよ…!! わ…!!」

「言つたな…?」

「パパ～？ママ～？」

パシャッ…

「あ…」

「いただきました」

「い、今のを見せるつもりかよ…？」

「トランクス…それは私が許さないよ…。そのカメラ寄こしな…！」

「ぶつ壊してやる…！」

「それはできないな、彼女から“ありのままの姿を写してほしい”って頼まれたから」

「トランクス、ホントに今のは勘弁してくれ…。」

「じゃあ、俺はこれで…」

「待ちな…まだ話は終わってないよ…？」

「あははははっ…！」

君は、君の時代を生きている…。

* * * * *

私は何のために生きてるんだろうと考へた事もあった。

人造人間達との出会いが、私の人生を大きく変えた。

そして2人の死が、私の人生をまた変えた。

一転二転しながら、私は私の人生を歩んでいるけれど…

「はい、約束していた写真だよ」

「これが…18号の旦那さんと子供さん…」

「どうだ？」

「あははっ、凄く優しそうな旦那さんですね…！…すぐ18号に怒り
れてそう…！」

「確かに…否定は出来ない、かな…？」

それでも私は…

「ふふつ、幸せそう…」

「あっちの18号が言っていたよ。君の写真を見たいって。」

「え、18号が…？」

「だから…」

今を…

「今度、一緒にあちらの世界に行つてみようっ！」

「ええっ！？ い、いいんですか…？」

生きるよ。

最初は恨むことでしか生き続ける事が出来なかつた。

けど、今は違う…。

「帰りたくないくなっちゃうかも…」

「大丈夫、その時は俺が無理矢理連れ帰るから」

「トランクスさん…涼しい顔して怖い事言いますね…。なんだか1
7号みたい…」

「誰みたいだつて?」

「いえ、何でも…」

私は…17号と18号の分まで生きるよ…。

胸に輝く、3つのシルバーリングと一緒に…。

【End】

さよなら（後書き）

はい、ここまでお付き合い頂き有難うございましたへへなんかちょっとタイトルから逸れちゃったような気もしますが…お友達に「ハッピーとバッド、どっちがいい？」って聞いたら「ハッピーかな？」って言われたので、このよつなEDとなりました！！もし、バッドの指定をもらっていたら…………トランクスかヒロイン…どちらかが死んでいたかもしません…へへ；もしかしたら両方死んでいたかも…？（おいwww）

ともあれ、最後までお付き合い頂き有難うございました！！ちなみに、ヒロインとトランクスは文中でも本人が言つてますが…“良き友”ですへへそれ以上ではありません…なんかホント…トランクスみたいになっちゃつたから…（苦笑）けど未来の人造人間サイドの小説を書くのは初めてだつたので…書いていて楽しかったですへへ

リク有難うございました そして、マガ5周年おめでとう…！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8135n/>

私は恨む、貴方の全てを

2010年10月17日21時28分発行